

『燕京文学』1939～44年 —占領地北京日本語文芸雑誌

満洲を含む今日の大陸には眞實の意味に於て文化は存在してゐないのである。あるものは殖地的な移民文化が跋を曳いてゐるだけである。左様な跋行的文化を我々は大陸文化として呼び育てあげ培つて行くつもりはない。
(野中修「大陸文学精神—序論として」)

監修・解題—戸塚 麻子 (常葉大学)
造 本—A5判 並製・総1,310頁
揃 価—65,000円 (別冊のみ分売可1,000円)

—収録資料—

【第一回配本】2021年8月 配本揃価 35,000円 ISBN978-4-910363-37-0
一巻 (360頁)
『燕京文学』1～4号 (燕京文学社、1939年4～8月)
二巻 (346頁)
『燕京文学』6～8号 [5号欠] (同、1940年1月～1941年5月)
別冊 [詳細は下記へ]

【第二回配本】2022年2月 配本揃価 30,000円 ISBN978-4-910363-38-7
三巻 (330頁)
『燕京文学』9～13号 (同、1941年9月～1943年3月)
四巻 (248頁)
『燕京文学』14～18号 [15号欠] (同、1943年6月～1944年9月)

別冊詳細 ISBN978-4-910363-39-4 価格1,000円
(26頁) 解題・総目次・著者名索引・各号発行年月一覧表

『燕京文学』は、日本軍の出資する『東亜新報』と深い関係があった。しかし、「軍の文化宣伝工作とは一線を画し」、「大東亜文学者大会」との距離を保った。

類縁書のご案内

1939～45年まで、「北支」で発行されていた日本語新聞。「外地」や「北支」の一側面、そこで発行されていた日本語新聞をとりまく状況、戦時下のジャーナリスト達の様相などを今に知らしめる資料。

『東亜新報』関係資料集
—日本占領下華北の日本語新聞とジャーナリスト【全2・別巻2】

編・解題—神谷 昌史
造 本—B6/A5判、糸上製／並製、総622頁
揃 価—50,000円

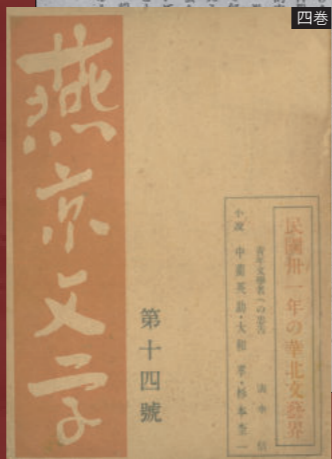
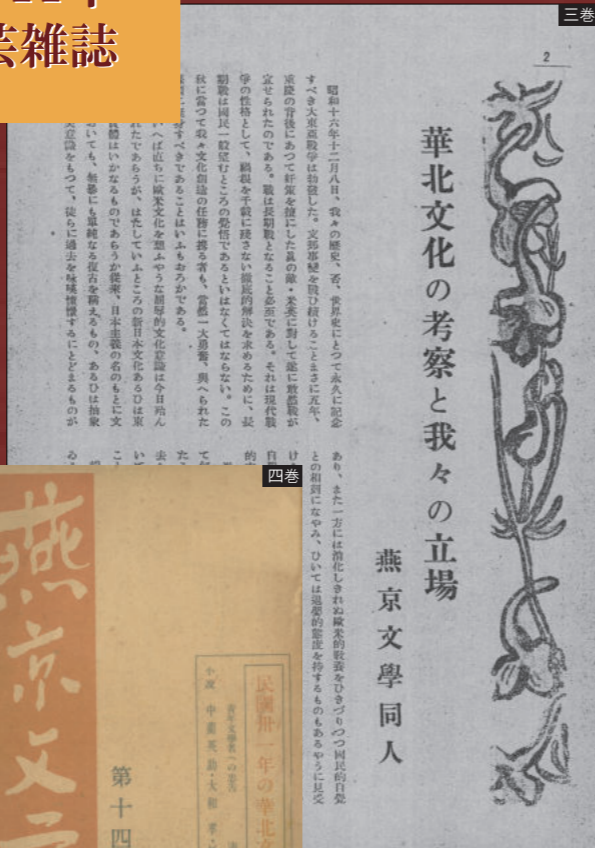
純文学雑誌にとどまらない(蒙疆唯一の文化雑誌)
『蒙疆文学』1942～44年—蒙疆文芸懇話会機関誌【全5・別巻】

編・解題—阿莉塔
造 本—A5判、糸上製函／並製、総1,680頁
揃 価—99,000円

戦後も外地に留まって「祖国復興」を画策し続けた日本人たちの生きざま、および日本国内で戦後空間を生きながらその不毛な運動を直接的間接的に支援した人々の思想を明らかにしていく。

『晋風 (総合文化雑誌)』—「蟻の兵隊」たちのコミュニティ雑誌【全1巻・別冊】

編・解題—石川 巧
造 本—B5/A5判、並製、総404頁
揃 価—22,000円



純文学雑誌にとどまらない
〈北京唯一の文芸雑誌〉
戦時期五年間の遺された軌跡。

日中戦争期に北京で発行されていた文芸雑誌である。

1939年4月から1944年9月まで

18冊の刊行が確認されている。

北京で唯一の日本語による文芸雑誌であり、

「北支在住の日本人」による「大陸文学建設」を目指し、

現地大陸に題材を採れるものを掲載していた。



全四巻・別冊(復刻版)

監修・解題……戸塚麻子

日本軍占領下の日本文化人や居留民の多様で複雑なありようを浮かび上がらせる

『燕京文学』1939～44年 —占領地北京日本語文芸雑誌

Kanazawa Bumpokaku
金沢文圃閣
〒920-0867 金沢市長土塀2-16-30
Tel 076-261-8884 Fax 233-3111
□書店様へ…ありがとうございます
直接小閣までお申し込みください
図版はすべて本書より
価格は税別 052/09/4000

Kanazawa bumpokaku
金沢文圃閣

刊行のことば

創刊号は一九三九年四月発行であるが、創刊から参加した主な同人は、編集兼発行人の引田春海(本名・木田春夫)、長野賢(筆名・野中修、朝倉康、他)、中国文学研究会の同人でもあった飯塚朗、『北京新聞』(のち『東亜新報』)記者で、芥川賞予選候補となった江崎磐太郎(本名・志垣忠)であった。このうち、長野と江崎は二度と日本の地を踏むことなく亡くなり、飯塚は戦後中国文学研究者として活躍した。途中から同人となり、戦後に文学者として活動した人物に、中藪英助、清水信、岡崎俊夫、柳沢三郎(常石茂)等がいる。

立石伯は、「『燕京文学』に掲載された諸作品を読んでみれば、そうとうこなれた、文学として質の高いものが多い。中藪英助、飯塚朗、野中修、江崎磐太郎、長谷川宏、引田春海、清水信などの諸作品は文学として悪くはない小説、評論群である」と述べている。また、郭偉は、「軍の文化宣伝工作とは一線を画した、そしていわゆる『大東亜文学者大会』との距離を保った」、「時代の大きな息吹」を避けられない状況下において、なおかつ「純文学」の理想を堅持することで、抑圧下の中国

文学者との接点を奇跡的に探り続けようと試みた」と論じている。さらに、田中益三は、「軍への阿(おもね)りとは全く無縁で、誌面を純粋に創作の場としていることが分かる。気骨のある人士も多し」と評価している。

では、創刊時の同人について、人的ネットワークに注目してみたい。まず主要同人の第一のグループは、引田春海や深瀬竜、長野賢等の、北京に留学しそのまま現地に就職した者たちである。第二に中国文学研究会同人で竹内好の友人でもある飯塚朗を中心とする中国文学研究会関係の人脈である。なお、長野は中国文学研究会の同人ではないものの『中国文学月報』に五回寄稿しており、竹内の友人でもある。彼らは中国語に堪能で、同時代の中国文学を原文で読みこなし、『燕京文学』や『東亜新報』で紹介した。このように、リアルタイムの中国文学や文化に強い関心を抱く人々を中心にしたことが、『燕京文学』の特質の一つとしてあげられるだろう。

飯塚朗	戸塚麻子	乃和民	盤太郎	住雄	治夫	俊策	加津子
20	4	28	37	48	58	68	101

官治	敏一	之助	亞明	正夫	明家
104	106	114	116	119	121

北京で生活しながら北京を眺め、在住者にしか書けない文学を創り上げようとした。彼等は、目の前に存在する異なる国土や文化、そして中国の人々を自分たちの目でしっかりと見据え、表現しようと試みた。内容は、創作(小説、詩、短歌等)、評論、エッセイ、絵、そして中国の現代作家の翻訳・紹介が掲載。

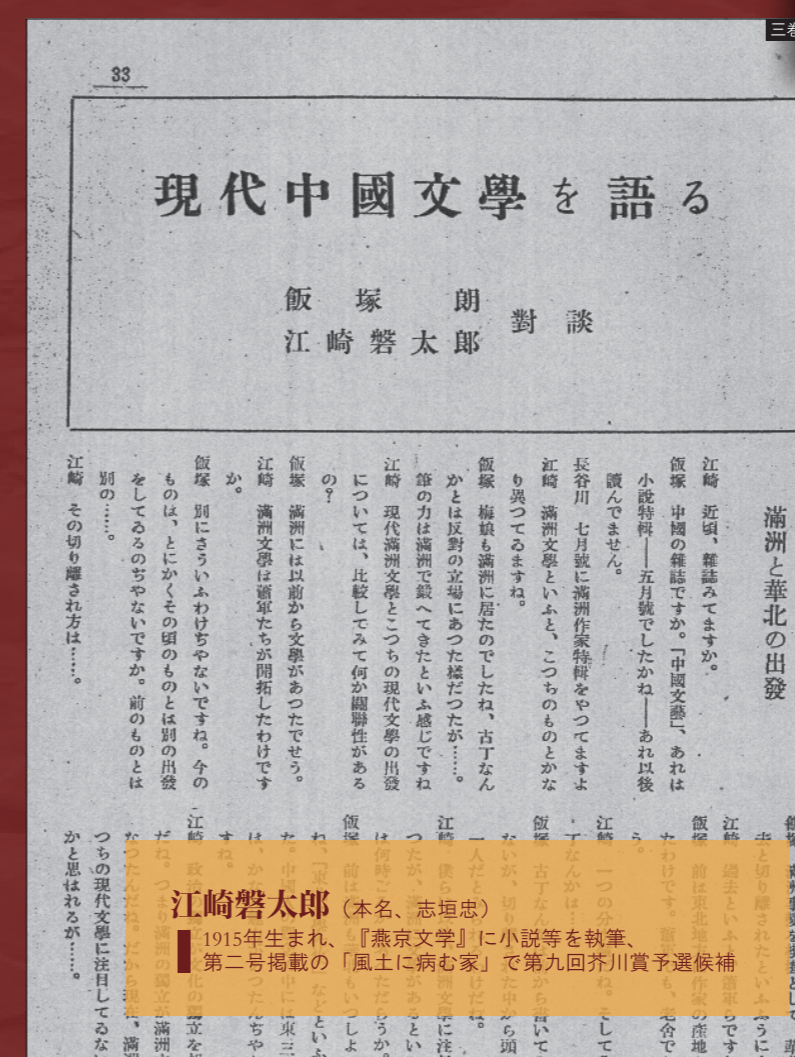
燕京文学 第二号

欄	題名	著者	頁
詩壇	北京印象	飯塚朗	2
	春の生聲	齋藤十魅	4
	集樂章	宮古田龍	8
	北川正明	加藤雄二	10
	盛一水	北川正明	14
	丁西林	盛一水	18
	日根暮兒	丁西林	20
	江崎磐太郎	日根暮兒	41
	木田春夫	江崎磐太郎	56
	深瀬竜	木田春夫	74
創作	風土に病む家	朝倉康	85
	酒	深瀬竜	74
	或る夜の北京	朝倉康	85
	黄	朝倉康	85
	土	朝倉康	85
	同	飯塚朗	104
	人	飯塚朗	103
	編者	飯塚朗	104
	同人	飯塚朗	103
	後記	飯塚朗	104

北京を中心に華北に居住する日本の青年が『燕京文学』につどった。



リアルタイムの中国文学や文化に強い関心を抱く人々を中心にしたことが、『燕京文学』の特質の一つ。



中藪英助 1920年生まれ
21歳のときに『燕京文学』に参加した。戦後『近代文学』からデビューし、純文学的作品を書く一方でスパイ小説等を書き、日本のスパイ小説の開拓者として評価されることになる人物。『燕京文学』出身では、戦後最も有名になった作家。1943年、中藪は「第一回公演」を書き、翌44年に第一回北支那文化賞を受賞。実在の中国人青年との交流をもとに、戦時下における日中の青年の間に友情が成り立ちうるかを描いた作品。

総目次(抄)

新聞評 X、Q、M
 燕京映画評壇 [勝野] 萍太郎
 或る夜の北京 [小説] 深瀬竜
 大陸文学精神 [文学評論] 野中修
 新従軍日記 [二] 謝冰瑩、野中修訳
 原野 [戯曲] 曹禺、長野賢訳
 善凱童子へ [短歌] 上田官治
 〈燕文月評〉「黄土地帯」創刊号 折生宣雄
 〈上海通信〉追放者の街—ユダヤ人避難民収容所を覗く [報告]
 山西省の印象 [報告] 井口創
 北方の農民 [絵と文] 久米宏—
 楊凝油画展 [美術時評] 長谷川宏
 蒙疆好日 不知火泉吉
 〈谷本知平氏を悼む〉
 北京療養記 [小説] 岡秋庭
 居留地の春 [小説] 木田春夫
 狂犬—怒りの虫と貧乏の女神 [小説] 中藪英助
 華北作家協会「日本文学全集」出版
 〈現地出版 書物展望〉
 純正北京語 山口碩平著/随筆 点滴 石川順著 橘義兄
 恢復期 [詩] 中藪英助
 『時代の子』と演劇附近 中藪英助
 〈日訳「啼笑因縁」について〉
 訳者飯塚さんに寄す 袁犀
 袁犀君に答ふ 飯塚朗
 新進作家集 新民印書館発行 [新刊紹介]
 濟南時代—アルファ [小説] 岡秋庭
 〈遺稿〉東單牌樓 (未完) [小説] 江崎磐太郎
 洛陽八景—河南作戦従軍記の一 [小説] 清水信